

**今日の古文書学 第12巻
史料保存と文書館**

東京 雄山閣出版発行
2000.6 307p 21cm

本書は、2000年に雄山閣から出版が開始された講座『今日の古文書学』全12巻のうちの1巻である。

『今日の古文書学』は、同じく雄山閣より1978年から80年にかけて出版された『日本古文書学講座』を引き継ぐ新しいシリーズであり、「古文書の基礎知識」に始まり、古代・中世・近世・近現代の時代別、天皇・外交・宗教・私文書の分野別などのテーマから構成され、この「史料保存と文書館」は第12巻に当たる。

本書は、編者でもある松尾正人氏の「総説」に続いて3部から構成され、以下の論考が収録されている。

I 史料保存の歴史と現状

安土・桃山時代以前の収集・保存

西岡芳文
江戸時代の史料蒐集と保存—紅葉山文庫を中心に 藤實久美子
明治時代の史料蒐集と保存 宮地正人
近世庶民史料の保存運動 林 英夫
文化財の保存運動—文化財保護制度の変遷を通して 湯山賢一
公文書館法と文書館 所理喜夫

II 文書・記録の整理・保存

古文書調査研究とその方法 吉田 優
文書調査の現段階 高橋 実
文書・記録の評価と移管 松尾正人
文書・記録の保存と管理 青木睦
文書・記録の修補 吉野敏武
記録史料論と保存・利用問題

富善一敏

III 文書・記録の利用と文書館・資料館

国の機関における文書・記録の保存と利用 中野目徹
都道府県文書館の文書・記録の保存と利用 水口政次
市町村の文書館と史料保存 久慈千里
欧米諸国文書館の文書・記録の保存と利用 石原一則
アジア・アフリカのアーカイブス

小川千代子

まず、各部ごとに個々の論考の内容を紹介し、本書の位置付けについても触れたい。

第I部は、西岡論文が中世社会における文書（情報）管理の諸相を解明し、藤實論文が江戸幕府等の史料蒐集・保存事業を論じ、宮地論文が明治期の修史編纂事業等に伴う史料の蒐集・保存や諸機関の史料保存に係る活動をまとめるなど、前半3本が文書管理史に関する課題を扱い、林論文が自らの体験に基づき近世庶民史料の保存運動の経緯を叙述し、湯山論文が文化財保護法の沿革と同法の史料保存に果たす重要な役割を指摘し、所論文が戦後の史料保存運動とその成果である公文書館法・国立公文書館法成立に至る経過と問題点を論述するなど、後半3本が、現在の史料保存に繋がる様々な動向を概観できる構成と

なっている。

第Ⅱ部は、吉田論文が古文書調査を通して地方史研究の目的意識を再確認する必要性を論じ、高橋論文が現状記録論など文書館学に基づく史料調査方法を紹介し、松尾論文が近現代の公文書等の評価・選別・移管に関する論点を整理し、青木論文が記録史料の保存管理の原則や新しい試みなどを報告し、吉野論文が古文書等の修補技術を紹介し、富善論文が記録史料学の概要を述べるとともに、新しい動向として国際標準記録史料記述原則 (ISAD (G)) を紹介するなど、史料調査から収集・整理・保存・利用に至る文書館等史料保存機関の業務全般に関係する論考がまとめられている。

第Ⅲ部は、中野目・水口・久慈諸氏の論文が、各々国・都道府県・市町村各レベルでの文書館等史料保存機関における史料の保存と利用の状況を報告し、石原論文が、欧米諸国の文書館を対象として、成立の歴史的な背景と現代における社会的機能を述べ、小川論文が、アジア・アフリカなどの文書館事情を報告するなど、内外の文書館の現状と問題点を把握できる構成となっている。

以上、本書の内容を大雑把に紹介したが、文書館の歴史的背景・業務・現状について、基礎的な知識を得るには格好の入門書であり、今後文書館と史料保存を巡る議論に際しては、本書の成果が十分踏まえられなくてはならないであろう。また、旧シリーズの『日本古文書学講座』では、史料の所蔵先としか認識されず、断片的に言及されるにとどまった文書館が、「今日の」古文書学のテーマとして取り上げられ、関連する論考が1冊にまとめられた意義は大きく、記録史料学の形成と体系化により、文書館が文化的歴史的遺産である史料を保存し関連する諸事業を展開する拠点であるとの認識が、古文書学の側においても浸透した現状を象徴していると言える。

ただ、文書館に勤務している立場の評者としては、疑問を感じる部分が幾つかあり、基

本的用語・公文書の評価選別・地域 (民間) 史料の保存の3点に関し、以下に感想を述べていきたい。

まず、基本的用語の問題である。本書の第Ⅰ部では史料が、Ⅱ部以降は文書・記録が主として各論文の表題に用いられるなど、用語が明確に使い分けられているが、その意図に関し具体的な説明は特にない。文書・記録については、中野目論文で「古文書学上の区分を意識したのでは」との推測がなされており、そのとおりとすれば、文書館での保存対象が古文書に限定されることも受け取れ、電子記録等を含む近現代資料の保存も課題となっている文書館の現状からすれば、少々違和感を覚える。

そもそも、近年の中世史料学の成果によれば、予め文書・記録・編纂物という古文書学上のカテゴリーに史料を区分する問題点が指摘されており、本書でも、西岡論文や中野目論文が、従来の史料概念の再考を促す指摘を行っている。新たな概念の定義自体は、講座全体を通じての課題であり、本書の目的ではないことは承知しているが、富善論文でまとめられた記録史料学の基本的立場との関係も含めて、用語の使用意図に関する説明が必要だったのではないだろうか。

続いて、松尾論文などで論議されている評価選別の問題であるが、評者は、その基準として言及される歴史的価値に関し、これまで共通認識が形成されないまま議論が展開されてきたのでは、という疑問を抱いている。

この点で共感するのは、久慈論文にある「過去に蓄積されてきた地域史料を収集保存するイメージを公文書の評価選別に投影している」との指摘であり、換言すれば、各論者が各々の学問的関心に合致するようないわば「理想的な」歴史資料の収集保存するイメージを歴史的価値に投影しており、結果として微妙なずれが生じてきていると言えるのではないだろうか。

議論の混乱を避けるためにも、まず公文書の持つ行政的価値に係る知識の蓄積が基礎的

作業として必要であり、その延長線上に、久慈論文でも触れられた行政の説明責任のために必要か否かという選別の指針が形成され、客観的基準の策定と共有に繋がるものと評者は考えている。歴史的価値に拘りすぎず、一定の距離を置くことが、評価選別を論じる上でとるべき姿勢であろう。

最後に、地域（民間）史料保存に関してであるが、この問題に関しては、本書の一部の論文にも見られるような、文書館が公文書保存に偏り地域（民間）史料保存を軽視しているのでは、との批判が以前から根強いように思われる。しかし、水口論文でも触れられていた「史料の現地保存」を基本理念として、都道府県と市町村の機関での連携などが文書館関係者の間で議論されてきた経緯があるし、実際に、都道府県立文書館が史料保存を目的とした協議会を設立し市町村のネットワーク化を図っている事例もあり、様々な制約の中で実践的な方法が模索されているのが現状で、決して軽視されているわけではない。

確かに、史料の散逸という深刻な問題は否定できないが、文書館がいかに史料保存に関与し得るかという課題意識や、吉田論文にあるような古文書調査への地域住民の参加という視点を発展させた論考があれば、議論がより建設的な方向に向かったのでは、と思われる。また、本書には直接関連する問題ではないが、地域での史料保存といいながら、ともすれば主役であるべき地域住民が不在のまま、内輪での議論が繰り返されている感があり、今後幅広い協力を得るためにも、誰でもが気軽に発言できる環境づくりが必要となってくるのではないだろうか。

以上、本書を通読しての所感を述べた。他にも重要な論点が数多く提示されているものの、評者の能力不足により、ごく一部を対象とした無いものねだりかつ的外れの見解に終始し、本書の成果を十分評価し得なかったこととお詫びしたい。